

皿をまわして
地域を元気にさんき
散岐皿まわし
健康づくり同好会事務局長・徳田節子 さん
Setsuko Tokuda会長・山本 勲 さん
Isao Yamamoto

テレビを見て「面白い」

「平成6年の11月でした。テレビで皿回しを紹介していて、『これは面白い』と思ったんです」。散岐皿まわし健康づくり同好会の会長を務める山本勲さんは、当時、散岐地区公民館の館長を務めていました。公民館での取り組みに、何か特徴のあるものが取り入れられないかと思案していたところだったのです。

放送局に連絡先を聞くと、熊本県の阿蘇町（現在の阿蘇市）の役場を紹介されました。先方に連絡を取り、習いたい

と依頼したら、「5日後にほかの県からも習いに来られますよ」。思案した末、思い切って夫婦で習いに行くことに。

現地で1時間ほど指導を受けましたが、山本さんはその場では皿を回せませんでした。宿に帰り、一晩中練習を重ねたところ、ようやく1枚回せるようになりました。

地元に戻ると、山本さんは公民館の役員会で「役員は全員皿回しをしてください」と宣言。翌1月から練習会を始めました。これが、後に散岐地区が皿回しの里として名を馳せるようになる、最初のきつ

かけだったのです。

技は全国トップクラス

現在事務局長を務める徳田節子（せつこ）さんは、ちょうど散岐地区公民館の嘱託職員として勤め始めたころでした。館長の宣言に「なんで私がこんなことをせないけんだろう」と思いながらも、皿を頭や手にぶつけてあざを作りながら、必死に練習しました。「その年の10月に、日本皿まわし協会全国大会に、公民館長と役員と私で行きました。目の前で5枚同時に回すのを見て『神業だ』」と思い、本気になりました。

たね」と徳田さん。

日本皿回し協会では、まわす皿の種類や枚数で段位の認定や師範（指導者）の任命を行っているのですが、同好会の会員が切磋琢磨して上達し、今では山本さんが8段（全国で3人）、徳田さんが7段（女性では全国で1人）を有するなど、技はトップクラスです。

河原町の「顔」

指導できる人も育ち、平成7年1月から地域の人も募集して練習を始めました。「最初の日は大雪だったんですが、1キほど離れた村から歩いて



夢フェスタとっとり・国民文化祭2002「皿まわし競演会」では、老若男女が、皿まわしの妙技を全国にアピールしました。（平成14年10月20日）

おカイコさん

今から約40年前まで、鳥取県内では副業としてカイコを育て、繭を作る農家が見られました。また、カイコの餌である桑畑の広がる景色も珍しくありませんでした。しかし、現在ではこのような養蚕農家や桑畑はほとんどなくなり、「カイコ」を実際に見たことのない世代が増えてきているように思います。

日本の養蚕は、弥生時代中ごろに中国より伝来し、飛鳥～奈良時代には日本各地に広まったといわれています。604年に聖徳太子が制定した「憲法十七条」の第十六条には、春から秋までは、農耕・養蚕などに力を尽くすべき時期であると記されていることから、古くから行われた産業であることがわかります。江戸時代には全国的にも生糸や絹織物の需要が増え、養蚕技術も普及しました。

鳥取藩では、江戸時代後期に養蚕業を奨励しますが、庶民は長い間絹を着ることが許されていなかったこともあり、その需要は少なく、大きな産業として発達しませんでした。

鳥取における養蚕業の隆盛は明治維新後のこと。養蚕業の発達に伴い、近代的な製糸技術も広がり、大規模な工場が設立されていきました。製茶や製紙、製鉄などさまざまな産業がありますが、鳥取県の広範囲に、しかも短期間で一気に広がった近代産業はこの蚕糸業であり、そこにはさまざまな歴史と人々の努力があったのでした。



養蚕繁栄之図（鳥取市歴史博物館蔵）

鳥取市歴史博物館では3月20日（土）から5月9日（日）まで展覧会「カイコ盛衰～鳥取・産業ノス、メ～」を開催します。ぜひご覧ください。

鳥取市歴史博物館学芸員 奥村寧子 おくむらやすこ

※「おうちだに画報」の連載は、今回で終了します。ご愛読ありがとうございました。

問い合わせ先

やまびこ館 上町88 (0857) 23-2140



皿まわしの妙技（左）25枚同時まわし（右）2人同時に7枚まわし

民文化祭では、全国から皿回

きてくれたおばあちゃんもいて。練習会場がいっぱいになりました」と徳田さんは思い出します。11月には散岐皿まわし健康づくり同好会として立ち上げ、技術が向上してくると、いろんな舞台に出演するようになりました。最初の大きな舞台は、平成9年に境港市で行われた山陰・夢みなど博覧会。市町村のステージで、河原町の代表として出演しました。

技を披露してきました。指導

大人のだけでなく、地域の小学生や中学生も皿まわしに取り組み、さまざまな場面で演じの愛好家を招き、皿まわし大会を実施。当時、大皿を20枚同時に回す技は他の地域では類がなく、「河原ここにあり」と全国に知らしめました。メディアの紹介もあって注目を浴び、指導の依頼を受けて、県内各地に指導に行きました。「テレビで見ても、宮崎市の延岡市から指導を受けにきた人もありますよ」と山本さん。「皿回しのメッカ」さながらです。

回せない人が辞めてしまつて」

する徳田さんは「子どもにしかできないこともありますね。縄跳びしながらとか、一輪車に乗りながら回すんです。若さに感心します」と目を見張ります。

新しい方法でもう一度

最盛期には40人を数えたメンバーも今は7人。同好会は曲がり角にきています。「皿回しは脳を鍛えるし、集中力が養われる。先日は、『リュウマチが治った』とお礼をいただきました。ただ、技術の差が気になるようで、うまく回せない人が辞めてしまつて」

ご覧下さい（13ページ参照）。

と山本さんは残念がります。徳田さんは「大人と子どもが一緒にできる皿まわしを作り上げてみたいんです。親子が一緒にがんばれば、次につながっていくはずですよ」と夢を語ります。素晴らしい技術と新しいアイデアで、大きな皿はもう一度回りだそうとしています。

※2009鳥取・因幡の祭典の「いなば絆ドリム」には散岐小学校の皿まわしクラブのみなさんが出演します（3月22日（月・祝）久松公園）。ぜひ応援に駆け付け、その勇姿をご覧ください。